

中国サマーセミナーの 成果と可能性に関する一考察

This research report is based on an inquiry survey on the Summer Seminar at Tsinghua University conducted from the 4th August to the 3rd September 2006.

－2006年度 清華大学サマーセミナー アンケート調査 報告書－

阿波村 稔
真水 康樹*
藤田 益子

キーワード：事前、事後、追跡アンケート サマーセミナーの役割 中国語の学習効果達成感と中国理解の深化

新潟大学の学生を対象として、2006年8月4日から9月3日まで実施された清華大学サマーセミナーに関するアンケート調査の報告書である。アンケートは、セミナーに参加した16名を対象として事前アンケート、事後アンケート、追跡アンケートの3回実施された。いわゆる択一式の調査形式をとらず、自由な記述式の意見を求めたため、統計処理に馴染まない面もないではないが、逆に夏期集中コースの果たしている役割をリアルに映し出している面もある。例えば、事後アンケートの5番目の質問は「あなたが期待したものはえられましたか？それは何故ですか？」というものだったが、それに対して、中国語の学習効果を挙げたものが9名だった。分析は本文に譲るが、サマーセミナーの達成感の大きな部分は、要するに語学力の進歩の度合いに由来することがよく分かる。その他に、中国理解の深化を挙げた者も5名いた。アンケートは匿名での回答であるため、学生たちの本音が溢れていると言って構わない。サマーセミナーの息づかいの聞こえる報告書としてご高覧頂きたい。

The answers of the inquiry may show clearly the effect of the seminar, such as many positive evaluations for the Chinese language training. We hope that the report can reveal vivid activities of the students in the class of the seminar.

* 法学部 教授

目次

はじめに……	82
第1部 事前アンケート……	84
第2部 事後アンケート……	86
第3部 追跡アンケート……	93
むすびにかえて……	97

はじめに

2006年8月4日から9月3日まで、新潟大学の学生を対象とした清華大学サマーセミナーが実施された【1】。同セミナーは、2004年度から開始され、実施3年目の本年度からは、新潟大学・国際センターが協賛し、講義内容、成績評価などの面に限って協力することとなった。中国語学習に関する夏期集中コースは、1994年に清華大学・人文社会科学学院と新潟大学・法学部との間で新潟大学サマースクールとして始められ、2003年まで10年間実施された後、現在の形態に引き継がれたものである。したがって、清華大学・新潟大学間の本プログラムは、通算して13回目の実施となった。今年度は、法学部10名、人文学部3名、農学部2名、工学部1名の計16名が参加した。1994年以來の参加者の累計は、249人に達した。この間、事故等は一度も生じていない。

この夏期集中コースについては、法学部の主催時代の2000年に一度、アンケート調査が行われたことがある【2】。本年度のアンケート調査は、調査結果の比較検討の可能性を確保する観点から、2000年度の調査の形式を踏襲して行い、事前アンケート、事後アンケート、追跡アンケートの3回のアンケートを行い、質問項目もすべて5年前のものをそのまま使用した。いわゆる択一式の調査形式をとらず、自由な記述式の意見を求めたため、統計処理に馴染まない面もないではないが、逆に夏期集中コースの果たしている役割をリアルに映し出している面もある。

まず、この清華大学サマーセミナーについて、学習面に限って簡単に紹介させていただくこととする。

- (1) 1日6時間、全期間合計で90時間の授業時間
- (2) やる気のある者だけのクラス
- (3) 課外時間の有効活用：日本語禁止

中国での夏期集中コースは、民間のものも含めて数多いが、この3条件を満たしているものはおそらく全世界でこの清華大学サマーセミナーだけである。民間企業の中国での夏期集中コースは、大抵は一般公募で参加者の質もやる気も多様、授業は午前中の4時間のみで、午後は自由時間である。これに対して本セミナーの上記(1)(2)のメニューは、徹底して

学習の効率性を重視している。毎日6時間の授業時間を設定しているサマーセミナーは、中国側の担当者も「中国国内では他に例がない」と言い切る。その6時間が、やる気のある学生だけで構成されているのだから、その相乗効果は言わずもがなであろう。募集にあたっては、しつこいほどに「勉強に励む」ことを条件に参加を認めている。この毎日6時間のメニューは第1回からずっと変わらない。法学部がこのメニューを初めて提示したとき、清華大学の留学生事務室長からは一笑に付したという。「日本の学生がそんなに勉強するわけがない」というわけである。民間のサマーセミナーは多くが観光半分の大名旅行であることは半ば常識だから、この事務室長の反応はむしろ当然だったというべきだろう。しかし、それだけに、第1期サマーセミナーが成功したとき、清華側の対応は一変し、「来年からは新潟大学を最優先にする。われわれだってやりがいのあるパートナーの方がいいに決まってる。人数は今後いくら増えてもかまわない」と、過大な評価を頂戴することになった。清華大学ほどの名門校からのこのお墨付きは貴重な財産となった。いまはこのメニューが、そのまま清華大学自身による新潟大学向けセミナーとして活用されている。(3)のメニューもあくまで学習効果を考えたことである。中国語を必死で身につけようとする者ほど、同国人とはできるだけ喋らない、もしくは、最低限、意識的に日本語抜きでコミュニケーションする。語学を身につけるとは、結局その言語で思考することだから、意識的な学生ならこれくらいは当たり前なことだ。サマーセミナーでは、食事の時間も含めて、廊下等、自室以外の全ての場所で、「日本語禁止」を徹底している。このため、全員が必ず揃う昼食と夕食のテーブルは、授業プラス・アルファの勉強時間になる。ある程度基礎力のある学生なら、限られた語彙のなかでも、かなりの幅の表現を行えるし、場を与えられることで応用力もつく。食事の各テーブルには、必ず上級者が配置されているので、適切なアドバイスも得られる。初心者は初心者で、ヒアリングのトレーニングになるし、語彙も増える。そして、一言も喋れなかった、聞かれていることはわかったのに答えられなかった悔しさは、さらにいっそうの学習意欲を育てることになる。効果は絶大だったと自負している清華大学サマーセミナーの特徴は以上である。1994年以來の北京大学への派遣留学生71名のうち64名、1999年以來の清華大学への派遣留学生16名中の13名が【3】、このサマーセミナーの経験者であることも、十分に理解されよう(2)。

以下、第1部としてまとめたものは、8月2日に実施した「2006年度サマーセミナー事前アンケート」の結果であり、第2部としてまとめたものは、9月2日に実施した「2006年度サマーセミナー事後アンケート」の結果である。また第3部の内容をなす「2006年度サマーセミナー追跡アンケート」は11月末に行われた。

前述のとおり、本年度の参加者は、法学部10名、人文学部3名、農学部2名、工学部1名の計16名であり、以下の報告では、特に断りのない限り母数は基本的には16名である。なお、学年別に見ると、1年生9名、2年生5名、3年生1名、4年生1名、女子10名、男子6名の構成比であった。なお、第3部「追跡アンケート」についてのみ、母数は14名である。太字の部分は、タイトルとアンケートの質問文である。

第1部「事前アンケート」

Q1. サマーセミナーの存在を何時知りましたか？

1. 入学前 2. 入学後

「入学前」と答えた者7名、「入学後」と答えた者9名。

「入学前」と答えた者の回答は以下のとおり：「3年前」、「新潟大学に入学しようかどうか（浪人しようか）考えたときに、このパンフレットを見て、背中を押されて新潟大学に入学しました」、「入学手続きの書類が来たとき」、「新潟大学のパンフレットを見たとき」、「入学時に配布された資料で知りました」、「合格発表のあと、大学から届いた入学手続きなどが入った資料の中にサマーセミナーのチラシが入っていた」。

「入学後」と答えた者の回答は、以下のとおり：「4月半ば」、「入学（直）後の（4月）ガイダンス」、「2年生の春」、「5月初め」、「5月中旬」、「中国語の講義で先生がサマーセミナーについて触れたから」、「封筒で送られてきたとき」、「今年の5月頃」；なお、2名が詳細な時期を記入しなかった。

Q2. サマーセミナーの存在をどうして知りましたか？

入学手続き書類と一緒に配布したパンフレットで知った者5名、担当の中国語の教員を通じて知った者3名、大学の掲示板が3名、入学後のガイダンスで知った者2名；その他、「兄がサマーセミナーに参加していたため」、「高校のとき、資料を取り寄せたとき」、「友人から教えてもらった」などの回答があった。

Q3. サマーセミナーに行く決意をしたのは何時ですか？

「入学前」に決めていた者は5名で、その時期についての回答は「3年前」、「チラシを見たとき」、「封筒で送られてきたとき」など。その他11名の決心の時期は多様である：「入学当初」、「中国語を履習し始めてすぐ」、「中国語（の授業）を取ったとき」、「説明会参加後」、「4月の終わり」、「直感的に決めました。ポスターを見て読んでいるうちに。5月頃です」、「5月の終わりころ」、「5月下旬」、「6月」、「6月中旬」；「締め切りぎりぎり」などの回答があった。

Q4. サマーセミナーに行くのは何回目ですか？中国以外も含めて、教えてください。

ほぼ全員の14人が初参加。2度目の者が1名。無回答が1名【4】。

Q5. サマーセミナーに何を一番期待していますか？

表現に多少の違いはあるが、14名が「中国語力の向上」を目的にあげた；その他の回答は、「1ヶ月では無理かもしれないけれども、日本に対する中国人の気持ちを知りたい」、「コミュニケーション」の2名である；なお、上記14名のなかで同時に次のような期待が示された。「中国語能力を向上させたいです。参観も楽しみにしています」、「中国語力の向上と中国の様子を肌で感じる。そして、コミュニケーション」、「中国人の生活を見る」、「語学力の向上、現地の人との会話を聞いてみたい」；中国そのものについての関心の程度は、ここからは判断できない。

Q 6. 勉強面で不安はありますか？それはどんな不安ですか？

14名が、授業についての不安に言及した。典型的な回答は、「まだ中国語が理解できるまでのレベルに達していないので、授業の進行についていけるか不安です」、「どのような講義内容かわからないので、どのように講義を受けてよいかわからない」；その他の回答は、1名が、「すぐに中国語に慣れるかどうか」であり、1名が無回答であった。

Q 7. 勉強以外の面で不安はありますか？それはどんな不安ですか？

ほとんどの学生が海外へ行くことがそもそも初めてであり、不安の固まりである：特に、食事を挙げた者2名、体調を挙げた者6名。この2つは重複していることが考えられる；その他の回答は、「言われたことが聞き取れるかどうか、周囲に迷惑をかけないか」、「精神的にやっつけられるかどうか不安」、「環境に適応できるかどうか」、「あまり衛生的ではないと聞いているので、体調を崩さないか不安です」、「生活で慣れない場所だと眠れず、ストレスを溜めやすいので、体調を崩さないかが心配です」、「外国に行くのは今回が初めてで、しかもいきなり一ヶ月も滞在するので体調を崩しそうで心配です」、「衛生に対する考えが日本と違うことと貴重品の管理」；「成田空港（から）ちゃんと乗れるか。」「暑さ」；2名が無回答であった。

Q 8. 日本語禁止の方針についてどう思いますか？疑問や反対意見もドンドン書いてください。

「はじめに」でも触れた通り、「土曜日、日曜日以外は一切日本語禁止」が清華大学サマースクール創設以来の伝統である。申し込んできた者には何度もこのルールについて確認をとっている。その上で申し込んできた者ばかりのためか、肯定派が9名、懐疑派6名、判断保留派が1名の比率だった：肯定派の見解は、「正直、はじめのうちはキツイと思うのですが、語学を学ぶには最良の手段だと思います」、「緊張感が保てて良いと思う。しかし、その日の予定などの大事な連絡も中国語でされると、分からなかった場合大変だと思う」；懐疑論としては、「なるべく禁止ってことにしたらどうでしょう。（許容）」、「きついな、と思います」、「授業以外は話していいと思う」、「実際、意思の疎通できないと思う」；判断保留は、「行って体験してみないと何とも言えません」とのことであった。日本語禁止についての学生達の結果的な評価については、「事後アンケート」のQ 2を参照されたい。

Q 9. 日本語禁止も含めて、部屋でもできるだけ中国語を使うよう心がける等、自分で中国語を身につける環境を意識的に維持できると思いますか？

「食堂、廊下等では日本語禁止だが、部屋の中までは干渉しない」というルールの上での質問である。肯定的見解は11名、判断保の4名は、「“中だるみ”しないようにしたいです」、「まだわかりませんが、そうしようと頑張りたいです」、「実際にやってみないとわからない」、「行って見ないとわかりません」；1名は、消極的だった。

Q10. サマーセミナーの参加費は誰が負担しますか？あるいは負担割合はどの程度ですか？

全額保護者の負担が10名、保護者への将来の返還が2名、半々の出費が2名、全額自己負担が2名。自己負担の心意気には敬服するが、主観的に言えば、自己負担であるか否かと、やる気の間には相関関係はないように思われる。

Q11. サマーセミナーに参加することについて保護者は好意的でしたか？それとも、説得するのに手間取りましたか？反対されたとしたら、それはどのような理由でしたか？

回答を見る限り、明確な反対のケースはなかったようである；好意的以上の状況を伝える回答として2つ紹介する。「好意的でした。むしろ、行け、と」、「好意的でした。(今、知ったのですが、親が大学生のころアメリカに留学したかったが、祖母に反対されたとのこと。)」；なお、保護者の不安の所在を伝える回答として、「費用が高かったのと、健康面での不安を口にしていました」、「参加にはすんなりと同意してくれたけど、中国は治安や衛生面が悪いのではないかとということで、心配されています」というものがあった。

Q12. 計4回、説明会をやりましたが説明の仕方はどうでしたか？不十分なところや説明の足りなかったところがあったら教えてください。

説明会についての不満の回答はなかった；唯一のクレームとして、「もっと説明会を開くべき」があった；なお、10年間のノウハウの蓄積である『清華大学サマーセミナーの心得』については、次のようなお褒めの言葉を授かった。「“心得”のおかげで大丈夫でした」；「わかりやすかったです。特に“手引書”は役に立ちました」。

その他、何か書きたいことがあったらどうぞ！！

「もっと安ければ更によかったです」。ごもっともな回答であるが、その場合は主催方式等の変更が課題となる。「サマーセミナーに参加する事が決まってから、毎日がとても楽しいです。実際に行くことで中国がより好きになると今から確信しています。ご迷惑をかけると思いますが、一生懸命頑張りますので、よろしくお願いします」。このような声が、セミナー継続の見えないエネルギーとなっている。こうした期待に応えられたか否か、事後アンケートの結果を見ることとしたい。

第2部「事後アンケート」

事後アンケートは、9月2日に行われた。サマーセミナーの最終日である。以下、母数はやはり16名である。

Q1. サマーセミナーの全般的な感想はどうでしたか？

1. 満足 2. まあ満足 3. やや失望 4. 失望

「満足」と答えた者12人、まあ満足が4名。

Q1'. その理由は何ですか？

サマースクールが学生1人1人に対して持っている意味は、この質問への答えに集約される。煩雑だが1つ1つ紹介することとする。まず、「満足」の12名。

「中国語以外にもたくさんのことを学べた。中国の歴史、文化。あと好朋友[親友:筆者]ができたこと」。

中国サマーセミナーの成果と可能性に関する一考察

「実際の中国の姿を一部でも見る事ができたこと」。

「体調を崩すことなく、毎日過ごせたから」。

「充実した8月をおくれたこと。(語学力の向上と友達との交流)」。

「中国語を今後、本格的に勉強していく上で良いきっかけになったと思います。また、実際に中国という国を自分の目で見れて、歴史や現在の街並を知る事ができたのもよかったです」。

「語彙が増えた。参観もよかった」。

「本場で中国語を学べただけでなく、参観授業など中国史の勉強にもなったから」。

「表面的だけれども、中国の文化を知る事ができた。大満足」。

「中国を肌で感じる事ができたから」。

「中国語の勉強はもちろん、日本にはできないことをいろいろやれた」。

「1ヶ月、集中して中国語を学ぶことができ、又、中国語を日常的に使う環境に身をおくことで、能力が向上したと信じるられから」。

「授業が良かったし、授業以外の自由時間や旅行も充実していたことです」。

次に、「まあ満足」の4名。

「授業内容はとても満足のいくものでした。最後の旅行は勉強不足で理解できない部分があったのが残念です。」

「日本での勉強に比べ、少々物足りない部分があった。」

「みんなが一生懸命努力しているから、自分もやる気になるし、観光の面でも中国の古い歴史をたくさん知ることができたから。」

「1ヶ月に多くの時間、中国語に触れる事ができたことは、中国語を学ぶ際とてもよい経験であり、今後いい影響を与えてくれたと思うから。」

Q2. サマーセミナーで何が充実していましたか？

以下、重複するものもあるが、「授業」を挙げた者が12名、「日曜ごとの参観」が5名、「(「買い物やりとり」を含む)自由行動」が3名。中国語の勉強をするという目的がはっきりしている以上、毎日6時間の授業は、苦痛でも何でもなく、むしろ喜びだったということだろうか。特筆すべき意見のいくつかを以下に挙げる:「授業も充実していましたが、一番勉強になったのは食事の時間だと思います。最初の頃は、何を皆が話しているのか理解できなかったのですが、段々自分からも話せるようになり、食堂での会話が一番勉強になったと思います」、「中国人の先生に少人数で習えたこと、参観」、「参観授業で中国の様々な歴史を知る事ができた事」、「食事のときの漢語タイム。授業では身につけることが(あまり)できないような単語や日常会話を楽しく覚える事ができた」。

Q3. 何が一番の収穫でしたか？(Q2と同じでも構いません)

この問いについても省かずに紹介することとする。

「発音が良くなったこと」。

「中国の見方が変わり、中国のことをもっと知りたくなったこと」。

「中国を直に感じたこと」。

「聴力〔ヒアリング、のこと：筆者〕の力不足を思い知りました」。

「サマセミ参加者と友達になれたこと」。

「授業を通じて自分が何ができないのかが分かったので、日本に帰ってから勉強をする目標ができたと思います。会話がきちんとできている人を見て、自分もできるようになりたいと思えたので、日本に帰ってからも中国語を頑張ろうという気持ちが増したのも収穫だと思います」。

「単語が増えたこと」。

「自由行動時に中国人と話す機会ができ、発音や喋り方等学べたこと」。

「中国語を勉強する上で、重要なことを感じとれたこと」。

「簡単な日常会話を話せるようになったこと」。

「中国語の本当に簡単な単語や会話」。

「友情」。

「中国を体感できたこと」。

「北京の今の様子を感じられた」。

「特にリスニング」。

「中国語にたくさん触れることができたことです」。

Q 4. 何か嫌なことはありましたか？差し支えなければ教えてくださいか？

「特にない」が7名。重複するが、食事に関するもの1名、「特にないです。敢えて言えば、中国菜は油っぽいのであきます」；体調に関するもの、3名；今回は部屋の配分の都合から清華大学の配慮で、全員に2人部屋の価格で1人部屋が提供されたが、「二人部屋が良かった」という声もあった；その他、以下の見解を紹介しておく。「食事や授業のときに遠くまで行動すること」、「部屋ごとにあるものないものあった点」、「晴れの日が少なかった」[天気のごとは、言われても仕方ない。期間中、特大の半円形の虹が見れた：筆者]；1名が無回答だった。

Q 5. あなたが期待したものはえられましたか？それは何故ですか？

中国語の学習効果を挙げたものが9名。サマーセミナーの達成感の大きな部分は、要するに語学力の進歩の度合いに由来する。中国理解の深化を挙げた者も5名いた。

「日本での授業ではあまり発音練習などをしないので、サマセミの授業で話す練習がたくさんあったのが、よかったです。」

「中国語の能力を多少。毎日勉強する環境にいたため。」

「中国語が進歩してよかった。食事の時間に中国語のみを話していたから。」

「現地の人と交流できたこと。積極的に話しかけたから。」

「中国はすごい国だと実感できました。私にとってはぎりぎりまで要求してくる国です。中国語は少なからぬ進歩があったと思っています。」

「1ヶ月（日本の授業では1年）くらいの勉強だけでは不十分で、帰国後も熱心に勉強しようという気持ちを持てたため、満足です。」

「中国語を本格的に勉強するよいきっかけになればと、期待していたのでそれは得ること

ができたと思います。』

「発音を習ったこと。完璧とはいえないけれども、anとangの違いがわかった。」

「はい、授業（日本）では、自分の発音の悪さがそれほどわからなかったが、中国に来ることによって発音を直すことができたから。これは、サマーセミナーに来ないと得られないものだと思う。」

「中国語の良い勉強になったことはもちろんだが、大学生のうちに海外で暮らしたかったのでとてもよかった。」

「得られました。Q1とQ3の理由によります。（中国を肌で感じることができたから。中国を体感できたこと。）」

「少しだけ得られた。中国の人と会話する機会があり、自分が望んでいた、話しかけることができたから。」

「得られたと思います。中国の歴史について興味があったので、参観授業や旅行で。」

「得られた。中国を少しでも知ることができたため。」

「中国人は意外に日本人をそこまで嫌いじゃないことに気付いた。」

「得られました。良い友達と良い先生方と良い助手の方がいたから。」

Q6. 何が期待通りではありませんでしたか？それは何故ですか？

「特になし」が2名。中国語の達成度に関するものが3件。その内容は、「中級班を甘く考えていたため毎日予習が大変でした。でも、中級班にして良かったです」、「もう少しコミュニケーションができるようになれると思っていました。それは、自分の勉強不足だとおもうので、今後の課題にしたいです」、「初級班のレベルをもう少し上げてほしいのではと思いました」；また、体調を挙げたものが1名。健康が維持できなかった場合には、いろんなところに影響がでることが避けられない；その他、参考になる意見に次のものがあった。「大学内で満足できるものがそろっているのに、外に行く機会があまりなかった」、「星が見えない。遺産が大切にされていないように感じた。過度の装飾や土産屋など。雰囲気……」；なお、5名が無回答だった。

Q7. 期待通りの中国語力がつきましたか？もっと詳しく教えてください。

1. 進歩した 2. まあ進歩した 3. あまり進歩なし 4. 全然進歩なし

「進歩した」は3名、「まあ進歩した」は11名、「あまり進歩なし」が2名。

まず、「進歩した」3名の自己分析を紹介する。

「自分一人ではとてもできなかったことが、他の人のやる気をもらって、みんなで上達できたことがよかった」。

「少しは中国語らしい中国語がしゃべれるようになった」。

「サマセミに参加する前よりは、聞きとれるようになったと思います」。

次に、「まあ進歩した」10名の自己分析(1名が無回答)。

「発音が良くなったこと。単語力がついたこと」。

「聞き取る能力がサマーセミナー前よりも上がった」。

「聴力はとにかく新しい言葉を聞き取ることに精一杯でした。口語は日本で習った語法と

似ていたので復習に近かったです」。

「進歩していないことはないが、まだまだ学ぶことは山ほどある。ネイティブとの会話を目標！！」。

「最初の頃は皆の会話がまったく分からなかったのですが、段々わかるようになりました。ただ、コミュニケーションがうまくとれません」。

「サマーセミナーに参加する前は聞きとりが苦手で、何回言われてもわからない事があつたけれど、サマーセミナーに参加してみて、簡単な日常会話なら聞きとれるようになったから」。

「ここに来る前は、『???』[分かりません：筆者]の意味さえ分からなかったが、400くらいの単語と日常会話を話せるようになった。しかし、聴力の力をもっとつけたかった。」

「発音が上手になったと思う。現地の人と少しだけ話せたのが、うれしい。『うまいね』みたいなことを言われてうれしかった。」

「劇的な進歩はなかったが、その責任は自分にある。」

「先生の話が最初と比べて、聞きやすくなったが、普通の人は難しい。」

最後に、「あまり進歩なし」の2人は無回答だった。

Q 8. 中国語力が伸びた・伸びなかった理由は何だと思えますか？

まず、ポジティブな理由の自己分析。

「1ヶ月間の滞在で、常に中国語に触れていた。もっと中国人と話せば、もっと発音が良くなったと思う」。

「予習・復習を欠かさなかったので、授業の内容は理解できているだと思います。もっと積極的に話せたら、コミュニケーションもできるようになったと思う」。

「毎日中国語を話したり、聞いたりしたから」。

「予習に力を入れ過ぎて、セミナー期間中に単語や文法の整理まで出来なかったから」。

「口語は伸びなかったと言うより、私にとっては復習の時間になったと思います」。

「語学力の向上は今後のがんばり次第だと思う。たかだか1ヶ月ではまだわからない」。

「伸びた。友達と楽しく単語の意味を調べたこと。食事のときに辞書は必須」。

「よくしゃべったから」。

「積極的に中国人に話しかけたことです」。

「授業で出た単語や文を使ったこと。努力がいるものの、全力とは言えなかったこと」。

「新しく習った事を使おうと心掛けた。単語力が足りなくて、聞きとりや会話が上手くできなかつた」。

以下は、ネガティブな自己分析。

「勉強に対する意欲の違い」。

「勉強は自分なりに努力はしたが、もっと勉強しなければならなかつたと思う。又、中国での教材以外にも文法書を買って勉強すれば、成果が少しはでたのだと思う」。

「やはり勉強不足」。

「自分の努力が足りなかつた」。

なお、1名は無回答だった。

Q9. 日本語禁止も含めて、部屋でもできるだけ中国語を使うよう心がける等、自分で中国語を身につける環境を意識的に作ろうとしましたか？

この問いは、各人の工夫が最も現れている箇所である。全員の記述をそのまま採録することとした。

「最初のうちはすべて中国語で会話しようと心がけたが、行き詰ったので使えるものから少しずつ使うようにした。現地の人に積極的に話しかけるようにした」。

「授業以外でも知らなかったことや単語をメモして覚えるようにしました」。

「特に食事の席では、できるだけ先生と、またはまわりの子と話してみようと思いました」。

「最初の日曜日以降は徐々に日本語が増えてしまったように感じる。部屋ではどうしても、日本語で会話をしてしまった。ただ、簡単な中国語は常に用いた」。

「自由行動のとき、タクシーの運転手などに知っている言葉を積極的に使っていた」。

「廊下や外ではできるだけ中国語を話そうと努力はしたが、ちょっとしたときか部屋の中では日本語を使ってしまった」。

「サマーセミナーに来ている人全員がそのような環境をつくろうと頑張っているの、自然と中国語を使うよう心がけられたと思う。部屋の中のテレビはリスニングがわりに、なるべく暇な時間は見るように心がけた」。

「作ろうとはしたが、あまり実践できなかった。しようとするが、文をどのように組み立てていいのかわからず、漢語の単語と日本語など変な会話であった」。

「タクシー、街中等で現地の人と話をするようにしたこと」。

「積極的に中国人に話しかけた」。

「課文での表現は、なるべく日常生活にて使うようにした」。

「部屋の中では日本語を使ってしまいました。授業が進んでいくにつれて、その日習った文法や単語を使って友人と中国語を話してはいましたが、もっと意識的に中国語を使う環境を作るべきだったと思います」。

「夜は日本語を話してました。???[ごめんなさい：筆者]」。

「作ろうとしたが、なかなか難しかったです」。

「してない」。

「(中国語を身につける環境を積極的に作ろうと) してない」。

Q10. 引率教員・助手・清華大スタッフへの評価や要望を一言

「楽しかったです。ありがとうございました」。労いも入った回答であろうが、ほぼ同様回答。ここではこれ以上紹介しない：なお、留意すべき点として、「桃李園[食堂の名前：筆者]のスタッフが大好きでした」、「大体よかったが、食事について少し改善してほしい部分があった」、など。

Q11. 中国語の先生についての評価も教えてください。

清華大学では基本的に経験の豊富なスタッフを選りすぐっている。夏場はしかし、スタッフが足りず、急ごしらえの大学院生のアルバイトも少なくない。これまで神経質にクレーム

をつけてきた部分だが、今回は避けがたいケースが生じた。教師本人との複数回の面談を行い、改善の要請をした。また、今後の留意を担当者に強く要望することとなった。以下、一般的な講師に対する評価だが、最後の2つは、丁寧に書かれた強いクレームであると、判断される。

「授業のほかにも、中国の様々なことを教わることができ良い先生だった」。

「皆の足を引っ張ってばかりでしたが、嫌な顔せず、私にも話しかけて下さってとてもありがたかったです。本当に感謝しています」。

「丁寧な教え方をしていただきました。日本語なしの授業は難しくもありましたが、とにかく新鮮でした」。

「授業の進度が速くてついていけなかったときもありましたが、改善してくれてよかったです。休み時間も授業後も、自分の質問に熱心に答えてくれました」。

「ピンイン、声調の違いを細かく指摘してもらえたのでよかったです」。

「休み時間も発音の悪い所を指摘してくれたり。積極的にコミュニケーションを図ろうとしてくれたのがよかったです」。

「説明の仕方や進め方に少し不満は残った。やはり教科書は最低終わらせてほしかった」。

「とても聞きやすかった。丁寧に教えてくれました」。

「口語の先生は雑談でコミュニケーションをとろうとしていた点がよかった。聴力の先生は授業の進め方が上手だった」。

「途中少し英語が多かった」。

「やはり院生の方よりも教師の先生のほうが充実していました」。

Q12. 同じに時期に滞在した他のグループと比べてどう思いましたか？

「他のグループを見ていないので、わからない」を初め、同様回答8名。無回答が8名【5】。その他、何か書きたいことがあったらどうぞ！！

以下6件を、そのまま掲載することとする。無回答が8名。

「正直、今、中国語力が向上したという実感はあまりありませんが、この夏に感じたことや経験したこと、学んだことを生かしていけるように帰国後も勉強を続けていこうと思います。今年、このセミナーに参加して本当に良かったです。本当にありがとうございました」。

「サマーセミナーに参加したことによって、本当に多くのことを学びました。日本に帰っても、勉強を頑張ります」。

「サマーセミナーに参加してみて、中国・中国語に対する関心が更に高まりました。日本に帰ってからも、中国語の勉強を頑張りたいと思います」。

「????? [私は中国が好き：筆者]」。

「サマーセミナーに参加して本当に良かったです」。

「最高の1ヶ月だったかも！！」。

第3部「事後アンケート」

追跡アンケートを行った理由は2点ある。ひとつは、語学力の面での効果を見極めるにはある程度の時間の経過が必要だと思われたこと。ふたつには、サマースクール終了時の興奮が冷めて、ある程度冷静に振り返ったときの評価を知りたかったことである。

以下に、2006年11月末に行った追跡アンケートの結果を紹介する。サマースクール終了後、そのまま北京大学国際関係学院に留学した4年生1名と、もう1名を除いたメンバーが回答を寄せてくれた。したがって、この第3部のみ、母数は14名である。

Q1. 新学期が始まって、自分に中国語力がついた実感はありますか？

1. 大いにある 2. まあ感じる 3. あまり感じない 4. ほとんど感じない

「大いにある」は2名。「まあ感じる」は11名、「あまり感じない」は1名。したがって、以下のQ2、Q3の回答者の母数は13名となる。

Q2. (Q1で1または2と答えた人に) 次の5つの項目について、一番力がついたと思われる項目から順に1、2、3、4、5の欄に項目名を書き入れて下さい(結果は下表を参照されたい)。

	会話	ヒアリング	発音	読解力	作文
1	2人	5人	6人	0人	0人
2	7人	4人	1人	1人	0人
3	3人	2人	3人	4人	1人
4	0人	0人	2人	3人	8人
5	1人	2人	1人	5人	4人

予想されたことかも知れないが、「ヒアリング」、「会話」など、オーラル・コミュニケーションの面での力の向上がいつそう身近に感じられるということだろうか。「発音」がそれについているのも、そのことを裏付けるようである。「読解力」、「作文力」共に順序は下位である。

Q3. 「(Q1で1または2と答えた人に) どんなときに、どのようにして実力の伸びを感じましたか? 簡単に書いてください」

「会話」能力の向上についての代表的な回答は、「中国語で相手の言葉が以前よりも理解できるようになり、それに対して答えがある程度中国語で返せるようになったとき」、「行く前までは先生との会話は教科書の丸暗記だったが、帰ってきてからは自分の言葉で表現できるようになった」、「留学生や授業の中国人の先生と簡単な日常会話を自分から話せるようになった」といったものである。

「ヒアリング」能力向上についての代表的な回答は、「中国語の文を聞くときに、以前よりも標準の速度に近い速さで聞きとれたとき」、「授業中に先生から中国語で質問されたとき

に、1回質問されるだけで内容がわかるようになった」、「中国人同士の会話を聞いていて、単語が聞きとれたとき」、「語学の先生が思いつきで話す質問を容易に聞きとれるとき」といったものである。

「発音」についての代表的な回答は、「中国語のテキストを以前よりもすらすら読めるようになったとき。四声を最初の頃に比べて発音できるようになった」、「自分ではよくわからなかったが、中国語の講義を受けている友達から、発音がきれいだねと言われるとき」、「授業であてられてもスムーズに読めるようになった。誉められた」、「zh、ch、shが良いねと言われるとき」、「サマセミに参加していない人達の夏休み中に勉強していなかったであろう発音を聞いたとき」といったものである。勉強の成果は、本人が自覚するだけでなく、やはり周りからの指摘によって、いっそうはっきりと意識できるようである。サマーセミナーの5,400分のコースに参加した者とそうでない者との力の差は、言うまでもあるまい；なお、無回答の者が1名あった。

「読解力」については、「勉強会の訳が以前よりも、早く正確にできるようになった」、「教科書の内容、中国語の本でわからない単語があったとき、前後の文脈で予測できるようになった」などの意見があった。

「作文」については、「授業中」という回答が2名、「スピーチコンテストの文章を作れるようになったこと」が1名。その他は多様で、無回答も4名と一番多かった。総じて、実力がついたという認識は、オーラルコミュニケーションほどははっきりはしていないのかも知れない。

Q 4. 中国語力を落とさないために、特別に何かしていますか？

「していない」という回答の2名以外は、何らかの取り組みをしている。「特別ではないですが、今期は中国語の授業を多くとりました」が最もオーソドクスな方法と思われ、その他に、「勉強会に参加させてもらったり、外書講読を受講し、なるべく毎日中国語と接するようになっています」、「中国で使っていた教科書や現地で購入した本など読んでます」、「中国語のテレビを見ている」、「中国語のCDを聞いている。NHKの中国語を見ている」、「中国人の友達と話す。毎日、中国語を少しずつ勉強する」など。サマーセミナー終了後3カ月弱の状態です。これだけ意欲が継続できているとすれば、十分な成果と言えよう。

Q 5. 「さらに中国語力をつけるために何かしていますか？

この問いは愚問だったかも知れない。ほとんどがQ 4と類似の答えか「特になし」と回答した。

Q 6. 1年以上の留学に関心はありますか？その関心に、サマーセミナーに参加したことで何か変化はありましたか？

関心が強まったと読める回答が12名、「今のところないです」が1名、無回答が1名。積極的な回答をいくつか紹介しておく：「あります。サマーセミナーに参加し、実際に生活を体験したことで、ただ中国に行きたい、という気持ちではなく、具体的に将来自分がやりたいこととどう結びつけていくのかを考えるようになりました」、「元々関心はありましたが、サマーセミナーに参加して中国の今を見て、更に関心を持ちました」、「あります。参加する前

はまったく留学は考えていませんでした」；消極的な関心向上の回答として、「関心がゼロではなくなった」；関心が行動と直結しない回答として、「関心はあるが、勇気がない」。

Q 7. サマーセミナーに参加したことで、中国に対する関心や、語学、留学に対する姿勢など、何か変わったことがありますか？

Q 8. (Q 7と関連して) それはどのような変化ですか？

Q 9. (Q 7と関連して) どんなときにその変化を感じますか？

Q 7、Q 8、Q 9については全員の回答を紹介したい。各人毎にQ 7、Q 8、Q 9への回答を一括して紹介する。

「Q 7. 中国の環境への関心が高まりました。また、中国人と話ができ、外国語を学ぶことは楽しいなと実感できました。Q 8. 中国と関わる仕事も面白そうだなと思いました。Q 9. 特に特別なときはありません」。

「Q 7. 歴史とかもっと知ってたらよかったなと思った。今度は一人でも行けるようになるといいなと思った。Q 8. 自分で出来ることを増やしたい。Q 9. activeな活動をしている人を見るとき」。

「Q 7. 変化したと思うが、それ以前のことを覚えていないので具体的に言い表すことができない。Q 8. 無回答。Q 9. 無回答」。

「Q 7. 中国語への関心はかなり強くなり、もっと語学を勉強したいと思うようになった。他の言語に対しても興味を持つようになった。Q 8. 見た中国語が何を意味しているのか、常に考えるようになった。Q 9. 中国に関するニュースや中国語を話しているのを耳にしたとき」。

「Q 7. 1年以上の留学は自分に無関係だと思っていたけれど、考えるようになった。Q 8. 上記同。Q 9. 以前に比べて中国についての新聞記事を見るようになった」。

「Q 7. 中国についてもっと知りたいと思った。Q 8. 中国に関する授業を中心にとっているところ。Q 9. 特になし」。

「Q 7. ある。Q 8. 留学について真剣に考えるようになったし、アジアについてもっと勉強したいと思った。Q 9. 進路について考えたときなど」。

「Q 7. 中国の政治、経済、文化に興味があった。Q 8. 無回答。Q 9. 無回答」。

「Q 7. 中国に対する関心が増しました。Q 8. 今の中国はどのような情勢なのか、中国の歴史や文化にもより関心を持ちました。Q 9. 中国に関連した講義に興味、関心を持ったとき」。

「Q 7. 特に変わっていません。中国に対する関心や、語学、留学に対する自分の認識を再確認しました。Q 8. 無回答。Q 9. 無回答」。

「Q 7. 中国に対する関心。Q 8. ただ、漠然と中国に行きたいと思うだけでしたが、実際に行って生活したことで、語学だけでなく、中国の環境や食について興味を持つようになりました。今後も中国と関わっていきたいと思うようになりました。Q 9. 将来のことを考えるときなど」。

「Q 7. 中国が好きになりました。Q 8. 新聞とかで中国を探している。Q 9. (Q 8の回

答、新聞とかで中国を探している)のような自分にふと気づいたとき」。

「Q7. もっと中国語が話せるようになりたいと思うようになりました。Q8. 上記(Q7の回答)に加えて、今までは中国語にしか関心がありませんでしたが、文化の面でも考えてみたいと思うようになりました。Q9. 同じ授業の中国人の服装を見たとき」。

「Q7. 講義やニュースなどで、中国に関するものに対して反応がよくなった。Q8. 新聞や雑誌などで中国の記事を読むことが増えた。Q9. 中華料理を作っているとき」。

Q10. 費用、単位など余計なものを無視して考えてみて、もう一度サマーセミナーに参加してみたいと思いますか？

14名全員が「参加してみたい」だった。優等生的な回答は、「語学の向上、中国の歴史や文化を学ぶところから、参加したいです」。他方、費用の問題は深刻であり、「無料なら是非」との回答もあった。以下もできすぎの回答だが、要点は費用面にあるように思われる。「費用面を考えなくていいならまた行きたい。(授業は大変だったけど、その分力がついたし、国際的な視野を広げることが出来たから。今度はもっと歴史の知識をつけてから(笑))」。

その他、何か書きたいことがあったらどうぞ！！

「サマーセミナーはとっても楽しかったし、勉強になったので、これからも続けていただきたいです。Q10の回答(是非とも!)の通り、費用面の問題を無視して考えるならまた行きたいです。ありがとうございました」。

「2年後、またサマセミに参加したいです、今のところ」。

「サマーセミナーに参加したことが、きっと私の大学生活での重要な意味を持つものになったと思います。得るものがとても多かったです。得ただけで、まだまだ吸収していませんが、今後自分なりにこの経験を活かしていきたいと思います。ありがとうございました」。

「サマーセミナーでは故宮や人民大会堂など中国の歴史と今を知ることが出来る様な場所を参観できたので、良かった。日本にいるだけでは知る事の出来ない“中国”を知ることが出来て本当に良かったです！とても有意義な1ヶ月でした」。

「あまり感じないと思ったのは(?)、サマセミ後に中国の方と話す機会があり、もちろん中国語で自己紹介したが、あまり通じなかったからです。それに相手の言うこともあまり聞きとれなかった」。

「サマセミは今までの自分を大きく変えてくれました。中国語をもっと勉強して、次に中国に行くときには、もっと話せるようになりたいです」。

「発音が上達するにはどうしたらよいか教えてください」。

むすびにかえて

1994年からカウントして13回目の今回の参加者は16名だった。「はじめに」で言及した2000年の参加者が27名、ピークだった2002年の30名から比べると半減である。ここ数年の参加者は、2004年が16名、2005年が13名であり、今年の参加人数は、明らかにここ数年の低迷した現実を反映している。もっともこれを単純に「低迷」と呼ぶことはできないだろう。それと言うのも、本報告書第2部のQ12に現れたように、低迷は本学にだけ生じているのではなく、もっと普遍的な現象だからである。実際、例年顔を合わせていた関西のある大学では、定員が埋まらず3年続けて清華大学での夏期集中コースが実施できなかった。北京の別の大学と提携している首都圏のある大学でも、3年続けて数名の応募しかなく、今年度も派遣を見送ったとのことである。こうした現実を鑑みると、ピークからの半減に止まり、曲がりなりにも継続した派遣を実現してきた本学と清華大学とのプログラムについては、その実績はむしろ建設的に評価すべきでだということになる。2003年のSARSの流行、2004年の反日デモ、前首相の靖国参拝と、確かに日中間の人的交流にはマイナスの要因が続いたことは否めない。本学の清華大学サマーセミナーが継続できたのは、逆風のなかでもなんとか生き抜いた老舗の底力とでも言うべきだろうか。

今年度は、本学国際センターが協賛に踏み切り、教育内容面についてのみコミットを行い、それがサマーセミナーにとって大きな下支えとなった。もっとも、他方で、清華大学自身が今年度は大きな変革の年にあたり、留学生事務室、留学生宿舎さらに附属食堂など、さまざまな施設の移転にともない、さまざまな困難が予想され実際に発生した。昨年までは、すべて同じ建物内にあった宿舎、食堂、教室が、それぞれ自転車での移動を必要とする別の場所に分散されて移ったことは、相当のダメージであった。雨の少ない天候に恵まれたことは、天恵と言うほかない。連日雨が降り続けた1994年のような天候であれば、学生の体調に測り難い影響を与えたはずである。この点、老舗の意地だけではどうしようもない運の良さがあったことも告白しなければならない。

6年前の「むすびにかえて」を改めて読み返すと、多くの変化が実感される。費用は旅行社経由になったために、数百万円の現金を抱えて北京市内を自転車で銀行まで換金に行っていたことは、今はもう笑い話である。交通も新潟・ソウル（仁川）便が毎日運行するようになったために、東京駅経由で成田まで行く必要もなくなった。他方、治安の悪化は明らかである。今回は半数近い学生が、自転車の盗難に遭うことになった。カギを複数つけても、なお盗られるのだから、いたちごっこである。中国の発展の負の側面は、こんなところにも影を落としている。もっとも、サマーセミナー業務の煩雑さには変化がない。その詳細は2000年の報告書の「むすびにかえて」に譲ることとする。国際センターは今回、協賛という形でこの事業に関与したが、それがこの業務の順調な遂行にある程度の役割を果たしえたのすれば喜ばしいことである。

前述の分析による限り、日中間の学術交流の先行きは、まだ明るくはないし、先も良くは

見えない。ただ言えることは、日中間交流の低迷とは裏腹に、中国語の学習熱は世界的にはますます高まっているということである。否、こうした世界潮流にもかかわらず、おかしな事に、日本でだけ逆風が吹いている、と表現する方が適切であろう。中国語学習環境の整備という潮流が、無視できないものであることは、日本のいくつかの私立大学がすでに「孔子学院」【6】の設置に踏み切ったことにも見て取れる。長期的には、中国サマーセミナー事業の一陽来復を見込む方が妥当な判断ではなかろうかと思われる。国際センターが拾ったのは、火中の栗などではなく、確実な予測に立った金の卵だったことが、現実によってゆっくりと証明されて欲しいものである。

註

- 【1】新潟大学法学部と清華大学人文社会科学学院とは、1998年11月11日に学術交流協定を締結した。その後、新潟大学工学部が清華大学建築学院と1999年6月7日に学術交流協定を締結した。これら2つの学部間協定を実績として、2000年3月20日には大学間の協定が締結された。
- 【2】その詳細については、「中国サマーセミナーの成果と可能性に関する一考察」（『新潟大学留学生センター紀要』第3号、2001年3月刊）を参照されたい。
- 【3】同数値は、法学部から情報提供を受けたものである。
- 【4】この調査項目は、かつて複数のサマースクールがあり、また中国サマースクールが破格に経済的だった時代のものであり、今日では以前ほどの意味はないと言える。
- 【5】現実に、他のグループはきておらず、この設問は無意味であった。本調査報告「むすびにかえて」を参照されたい。
- 【6】中国・教育部のプロジェクトで、海外に中国語学習の拠点を構築するもの。中国版の「ブリティッシュ・カウンシル」と称される。